HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第70号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2015-11-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73637
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_70.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第70号
No. 70 November, 2015

【 特　集 】オープンアクセスウィーク 2015
【レポート】第1回 SPARC Japan セミナー 2015
【レポート】機関リポジトリ中堅担当者研修
【レポート】HORIZON2020国際シンポジウム
【レポート】鹿児島県大学図書館協議会講演会
【 連　載 】今そこにあるオープンアクセス

【特集】オープンアクセスウィーク 2015

2015.10.19–25

今年もオープンアクセスウィークの期間中、各地でさまざまな取り組みが行われました。
今回のテーマは「Open for Collaboration」。その模様の一部をお届けします。

可能性は無限大。OAサイコロ登場！

室蘭工業大学附属図書館

OAW グッズ ＆ 展示も健在！

北海道大学附属図書館

金沢大学附属図書館

法政大学市ヶ谷図書館

聖学院大学総合図書館

お馴染みのOA 紙芝居も各地で上映！

東北学院大学中央図書館

神戸松蔭女子学院大学図書館

階段を利用したPRもインパクト抜群！

小樽商科大学附属図書館

オープンアクセスウィークとは…

オープンアクセスウィーク（Open Access Week：OAW）は、オープンアクセスの意義を周知する世界的なイベントです。期間中、オープンアクセスに関する催しが、世界各国で集中的に開催されています。

Open Access Week
http://www.openaccessweek.org/

恒例の研究者インタビューもかかせません！

東京歯科大学図書館

オープンアクセスウィークは毎年開催されている世界的なイベントで、オープンアクセスの取り組みについて理解を深めるたいへん良い機会です。今回紹介した取り組みや下記のオープンアクセスウィーク特設サイトを参考に、みなさんもぜひ参加してみてくださいね♪

■ OAW 2015（DRF Wiki ）
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?oaw2015

■ Open Access Week 2015 のアルバム（Flickr）
https://www.flickr.com/photos/drf_museum/sets/72157659822493585/

【レポート】
第1回 SPARC Japan セミナー 2015
学術情報のあり方-人文系の研究評価を中心に-

開催日：2015年9月30日　会　場：国立情報学研究所

9月30日、第1回SPARC Japan セミナー 2015「学術情報のあり方―人社系の研究評価を中心に―」が開催されました。人社系の研究評価やインフラ整備を含む研究支援に、大学および図書館が果たせる役割や可能性を考えることをテーマに、5つの講演とパネルディスカッションが行われました。

■評価以前の問題：人文学・社会科学とは何なのか

講師：中尾 央 氏（山口大学）

数に表れないものをどう評価するのかということは分野に限らない課題であり、研究者はどう評価してほしいのかを声に出していくべきだと述べられました。

■社会科学の研究評価に求められる多面性

講師：野村 康 氏（名古屋大学）

発表形態の特性を踏まえ、学問の発展や研究の方向性、アウトリーチの貢献などを考慮して、多面的な評価を行う必要があると述べられました。

■「人文系の研究評価はどこを目指すのか？」

講師：永崎 研宣 氏（人文情報学研究所）

社会への貢献度をどう評価するか、各評価の評価軸のずれにどう対応するかなどの課題があることを挙げ、その出口として、まず評価を数えられる（数値化、定量化できる）ようにすること、新たな評価軸を取り込んでいくことなどが挙げられました。

■責任ある研究活動の推進と研究評価

講師：中村 征樹 氏　（大阪大学）

研究不正とされる研究行為、研究環境との関係について説明され、責任ある研究活動の視点を踏まえると人社系における研究評価はどのように考えられるかということを問いとして出されました。

■英国における研究評価制度と人文系の学術研究

講師：佐藤 郁哉 氏　（一橋大学）

英国の研究評価制度について、評価にかかるボリュームや評価による傾斜配分の状況などを紹介され、意図された効果がある反面、競争の激化や評価自体のコスト増などの負の効果もあることを指摘されました。

パネルディスカッションでは、奈良先端科学技術大学院大学の駒井章治氏がモデレーター、5人の講演者と千葉大学の竹内比呂也氏がパネリストとなり、議論が行われました。竹内氏が「人社系では評価の対象となる研究成果の電子化が進んでいないことが問題であり、それらをきちんと整備していくことが多様な評価の基盤になる」と話されたことが印象的でした。

先生方のお話は大変新鮮で、図書館員として人社系の研究支援のために何をしていったらよいのかを考える良い機会になりました。今後機関リポジトリへのコンテンツ登録を呼びかけていく中でのポイントとして、今回のセミナーを覚えておきたいと思います。

参加レポート：香川 文恵（金沢大学）

※ 講義要旨等は下記で公開されています。
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20150930.html

2号連続SPARC Japan セミナーレポート！　次号は、
第2回 SPARC Japan セミナー2015 (オープンアクセス・サミット2015)
「科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて
- e-サイエンス，研究データ共有，そして研究データ基盤 -」
をレポートします！

【レポート】
機関リポジトリ中堅担当者研修

開催日：2015年10月13日～14日
会　場：神戸松蔭女子学院大学（初日）神戸大学（2日目）

機関リポジトリ推進委員会主催、平成27年度「機関リポジトリ中堅担当者研修」に参加しました。この研修は、10月13日の講義等、翌14日の国際シンポジウム「HORIZON2020によるオープンアクセス政策とオープンサイエンスの国際的課題」2日目への参加、事前および事後課題から構成されており、13名の受講がありました。本稿では主に13日の内容についてレポートします。

■地域コミュニティとリポジトリ

講師：岡本 健 氏（奈良県立大学）

機関リポジトリ＋地域データベースをコンセプトとした地域創造データベースについてお話しいただきました。このシステムでは学生の地域に関する学習成果物も公開しているそうです。学生に発信を意識した成果作成を意識させ、公開・フィードバックを得ることが情報リテラシー教育になるという点は、今後の戦略を考える際にも参考にできると感じました。また、このシステムのお話の他にリポジトリのコンテンツ収集に関して、代表的な学会や学術誌が確立されていない新しい分野の研究をされている先生や広報マインドを持つ先生に声をかけてみると良いのではないかということを仰っていたのが印象に残っています。

■国際的なオープンアクセス動向

講師：栗山 正光 氏（首都大学東京）

米国、英国、EUそれぞれのオープンアクセス動向について解説がありました。米国では法的整備（月刊DRF第68号連載参照）、英国では多額のゴールドOA費用の研究機関へ分配、EUは研究助成プログラムHORIZON2020の中で助成対象のOA義務化等をしているそうです。一方、出版社サイドは新たに購読とAPCをまとめた契約形態を提示するなどの戦略に出ているとのお話もありました。以上のような”動向”も興味深かったですが、”動向に関する情報源”についても触れられていたことが印象に残っています。海外MLなども含め、情報を収集・分析できるようになることを期待されているのかなと感じました。

■商業的学術出版社への抵抗史

講師：尾城 孝一 氏（東京大学）

研究コミュニティ、大学図書館による商業出版社への抵抗の歴史についての講義でした。研究者・SPARC・図書館コンソーシアム等々、さまざまな抵抗がありつつも、結局はあまり上手くいっていないとの結論で締め括られました。ただし、コンテンツ数・抵抗の戦略におけるグリーンOAのポテンシャルはまだ残されており、今後のリポジトリにおける行動としては、義務化ポリシー策定やそのポリシーを運用していく仕組み作りが必要だろうとのことです。出版社への対応はリポジトリ担当にとどまらない課題であると感じました。

■国内外のデータのオープン化

講師：西薗 由依 氏（鹿児島大学）

オープンアクセスからデータのオープン化も含めたオープンサイエンスに向かっているというお話がありました。これについては様々な関係者がおり、リポジトリで全てを担えるわけではないが、どのように関わっていくかを考えていく必要があるとのことです。また、海外では既に事例のある、研究データ管理（RDM、最終成果物だけでなく研究プロセス全体の中でのデータ管理）サービスにおいては図書館を含む複数部署の連携により行っている所が多いそうです。日本でもRDMの流れは生まれてくると考えられますが、この点においても館外との対話が重要になっていくのかもしれません。

ほかにも2回のグループディスカッション、1回の全体ディスカッション等、日ごろの業務やこれからの方向性をについて考える良い機会となりました。今回の研修を通じて、自分の中でモヤモヤしていた部分について答えを出していくためのヒントを得られた気がします。

参加レポート：川村 拓郎 （広島大学）

***機関リポジトリ推進委員会ホームページへも今回の研修の報告記事が掲載されています。ぜひ併せてご覧ください。**
「平成27年度機関リポジトリ中堅担当者研修を開催しました」 https://ir-suishin.repo.nii.ac.jp/?page_id=31#_href_221

【レポート】
HORIZON 2020 国際シンポジウム

開催日：2015年10月14日　会　場：神戸大学

パネルディスカッションの様子

2015年10月13日（火）～14日（水）、神戸大学百年記念会館において、EUI関西主催による国際シンポジウム「HORIZON 2020 によるオープンアクセス政策とオープンサイエンスの国際的課題」が開催されました。

1日目は、「ヨーロッパのオープンアクセス政策と大学図書館活動」がテーマで、最初の講演として、駐日欧州連合代表部のLee　Woolgar氏が登壇されました。Woolgar氏からは、ヨーロッパの多国間研究開発・イノベーション促進プログラムHORIZON2020の概要説明があり、6年間で800億ユーロという莫大な予算でEU各国の研究を助成し、研究成果や研究データについてはオープンアクセスを義務化するという方針であることなどについてご説明がありました。

2つ目の講演は、EU研究者のための枠組みであるOpenAIREのDonatella Castelli氏から、人的ネットワークと技術的インフラを柱とした活動と、OpenAIREが目指す「新しいインパクトメトリクスの作成」「EU以外の同様の組織との協同・連携」「法人化して継続的な研究支援インフラへ」などについて説明がありました。

3つ目の講演は、EUにおいてオープンサイエンスの支援を行っているFOSTERのEloy　Rodrigues氏からFOSTER設立の目的や活動について説明がありました。オープンアクセス支援として、対面研修やポリシーのハーモナイズ等を行っており、今年度からE-learning（セルフラーニング）による研修も始めるとのことでした。

その後、学位授与機構の土屋俊先生がモデレーターとなり、3名の講演登壇者と同志社大学の佐藤翔先生によるパネルディスカッションが行われました。佐藤先生から3氏への質問が中心という形式でしたが、「EU内の研究者はオープンアクセスやオープンサイエンスという動きについてどういう反応なのか？」という質問に対し、不確実性はあるものの多くの研究者は歓迎しているという回答がありました。これは、「他の研究者のデータを利用できること」「研究評価とオープンアクセスが関連していること」「所属機関や研究助成団体からオープンが義務化されておりそのための資金提供も受けていること」などが理由であるという説明がありました。

（次ページへ続く）

（前ページからの続き）

2日目は、「日本のオープンアクセスと大学図書館の国際的課題」がテーマで最初の講演は学位授与機構の土屋先生から日本のオープンサイエンスについて叱咤激励を頂きました。

2つ目の講演では、科学技術・学術政策研究所の林和弘氏から、政府や日本学術振興会から見たオープンアクセス・オープンサイエンスに関する動向と展望についてご紹介頂きました。

3つ目の講演では、京都大学附属図書館の引原隆士館長から、京都大学が公開した、「京都大学オープンアクセスポリシー」でのオープンアクセス義務化の内容とその過程についてご説明頂きました。

4つ目の講演では、千葉大学附属図書館の杉田茂樹氏から、日本における機関リポジトリの現状やJunii2のデータセットについてご説明頂きました。

その後事例報告として、京都大学附属図書館からリポジトリ「KURENAI」、機関リポジトリ推進委員会から「学位論文の電子公開に関する分析」、文部科学省研究振興局から「オ―プン化に関して大学に期待されること」についてそれぞれご報告頂きました。

最後に日本大学文理学部の小山憲司先生がモデレーターとなり、Castelli氏、Rodrigues氏、林和弘氏、引原隆士氏、杉田茂樹氏によるパネルディスカッションが行われました。OpenAIREから見た日本の印象として、「リポジトリ同士のつながりが弱い」「クラウドソリューションの平準化によるスケールメリットをもっと考えるべき」「OpenAIREと日本はもっと協力できる」等の印象を持たれているとのことでした。

また、「日本では図書館員が代理公開という形でオープンアクセスを実現している場合が多いがEU内ではどうか？」という質問に対し、「研究者が自らセルフアーカイブしている」「そのためにドロップボックスライクなツールを公開し、研究者の手間が少しでも減らせるような努力をしている」などが理由であるという説明がありました。最後に、DRFも参加しているCOARについて、Rodorigues氏よりご紹介頂きました。

密度の濃い2日間でしたが、ヨーロッパでのオープン化事情に対し、日本は随分と遅れをとっているという事を痛切に感じさせられた2日間となりました。DRFそしてこれから出来る新たなコミュニティーで日本も追いつき追い越せで頑張って行きましょう。

梶原 茂寿 （北海道大学）

登壇者と神戸大学附属図書館長

【告　知】

平成27年度機関リポジトリ担当者オンラインワークショップ「研究データから研究プロセスを知る」受講者募集中！

メールによる班討議と自機関での研究者へのインタビューを中心としたワークショップです。
「最近研究者インタビューしてないなぁ…」というみなさま、きっかけ作りにぜひご参加ください！

開催期間：2015年11月18日(水)から2月末ごろまで（3か月間）
募集人数：20～30名 程度（先着順）
申込期間：2015年10月30日(金)～11月13日(金)
申込方法：下記DRF ホームページ（DRF Wiki）設置の申込フォームによる
平成27年度機関リポジトリ担当者オンラインワークショップ 「研究データから研究プロセスを知る」
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?onlineworkshop2015

※ プログラムの詳細については、DRFホームページにてご確認ください。

【レポート】
鹿児島県大学図書館協議会講演会
国際的動向を踏まえたオープンサイエンスの今後の展望と機関リポジトリの未来
開催日：2015年10月21日　会　場：鹿児島大学

2015年10月21日、鹿児島県大学図書館協議会が鹿児島大学で講演会を開き、東北学院大学の佐藤義則先生が「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスの今後の展望と機関リポジトリの未来」と題してお話しされました。

まず、3月30日に内閣府の検討会が提出した報告書を引きながら、図書館・機関リポジトリがオープンサイエンスの基盤を担うことの説明がありました。

学術コミュニケーション及び学術そのものの様態が変化する中、デジタル技術によるデータの保存・共有・再利用可能性の向上やデータの量的増大を背景として、研究データ管理とデータへのオープンアクセスが問題となっている、ただし政策的な流れが出てくる以前から分野によっては行われてきたことだ、との指摘に続き、NSFの取り組みやG8オープンデータ憲章等、オープンサイエンスをめぐる国外の経緯及び事例が紹介されました。

データ公開・共有の課題として、データとは何かが曖昧であること、権利関係や公開のインセンティブが学術論文と異なること、データの利用は文脈に依存すること、データ出版という単純化の問題、保存とアクセスのバランス、学術論文と比べた保存コストの高さが挙げられました。

最後に、図書館および機関リポジトリとの関係において、共同で発見の仕組みを作る知識インフラの特性等の観点が提示され、研究データ公開は技術的問題よりもむしろ社会的経済的問題であることを踏まえ、全体のバランスがとれた形で進めていく必要がある、と結ばれました。

休憩明けの質疑応答では、Q.「オープンサイエンスに求められる職員をどう養成するか」A.「同じものが大量にある文献と異なり、データは博物館や美術館の世界に近い。保存のための技術やマネージメント力が必要」等のやりとりが聞かれました。

課題は多いですが、先生のおっしゃった「すぐには難しくとも、備え、心構えだけはしておく」の姿勢が大事だと思いました。

土持遼馬（鹿児島大学）

【連載】 今そこにあるオープンアクセス：Clear and present Open Access （第15回）

ハゲタカOA出版を防ぐための提案

― Proposals to prevent predatory OA publishing

栗山　正光
首都大学東京学術情報基盤センター教授 / DRFアドバイザー
Researchmap: http://researchmap.jp/read0195462

先月号では佐藤翔さんがハゲタカOA出版の拡大に関する研究論文（正式に『BMCメディスン』というOA誌で発表された）を紹介された。今回はそれを勝手に受け継いで、若干の補足とその後の議論の紹介を行いたい。

そもそもの始まりはリチャード・ポインダーが、いつものインタビューではなく、自身の意見をブログに掲載したことである。彼はハゲタカ出版の拡大を問題視し、例のジェフリー・ビール*iのブラックリストに挙げられている雑誌の編集委員名簿をデータベース化してはどうかと提案している。このデータベースは、研究者が勝手に自分の名前が使われていないかチェックしたり、その雑誌が本当にハゲタカなのかどうかの判断材料にしたりなど、様々な用途に使えるのではないかと言う。

これに対して、ハゲタカ出版がゴールドOA全体に占める割合は実際にどのくらいなのかという疑問が出され、一つの参考として、上記論文が著者ビョーク自身（共著で第一著者はシェンという大学院生）から紹介されたわけである。この論文もビールのリストをデータ収集の出発点にしている。そのせい（ビールには批判も多い）かどうか、ハゲタカ出版の脅威が誇張され過ぎているという違和感を拭い去るところまでは行かなかったようである。

一方、ブラックリストの作成に時間を費やすより、研究者の教育に力を入れるべきだという意見も出た。この方向での試みとして紹介されたのが、「思考せよ。チェックせよ。投稿せよ(Think. Check. Submit.)」である。

これは論文の投稿先を選ぶ際の注意事項を3段階に分けて示した簡便なチェックリストで、特に若手の研究者に向けたものらしいのだが、正直、これだけ？という感じである。ALPSPを始めとする出版、図書館関係の団体が協調して行うキャンペーンとのことだが、効果のほどは今後の検証に待つしかない。

もう一つ、「責任ある出版資源のための連合(Coalition for Responsible Publication Resources (CRPR))」という構想への参加も呼びかけられた。こちらは出版業界の任意加盟の組織で、基準を満たした会員にバッジ（お墨付き？）を与えるというものである。DOAJと同じようなホワイトリスト的アプローチと言える。ドナルド・サミュラックという人が、ネイチャー・グループのヘイゼル・ニュートン、トムソン・ロイターのジョシュ・ダール、そしてジェフリー・ビールと共に、ISMTEという編集者の国際会議で発表した。

ちなみに、ビールはこの会議で基調講演も行っている。メーリングリストでは、CRPRもビールの個人的評価が基本になってしまうのではないかという疑惑を持たれ、サミュラックがそうではないと弁明する一幕もあった。こうした出版関係者の活動を業界の自浄作用と見るのはナイーブに過ぎるのかもしれない。

*i Jeffrey Beall.　以前の本連載ではBeallを「ベル」と表記していたが、「ビール」の方が原音に近いことがわかったので訂正させていただく。

【次号予告】
【特 集】2015年オープンアクセス10大ニュース
【特 集】図書館総合展レポート
【連 載】かたつむりとオープンアクセスの日常　ほか

■ デジタルリポジトリ連合 月刊DRF ホームページ
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/
■ Facebook もやってます！
http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation
■ 月刊DRF読者アンケート受付中！
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html
■ 月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています
gekkandrf@gmail.com